

# 教育 を 読む

河合文化教育研究所  
主任研究員 丹羽健夫

「柿くへば鐘が鳴るなり法隆寺」の句で知られる正岡子規からはじまる、人々の物語である。

子規は1867年（慶応3年）愛媛県松山に生まれた。同郷に秋山好古・<sup>よしふる</sup>真之兄弟がいる。日露戦争で兄の好古は騎兵としてロシア軍のコサック騎兵と対戦して善戦し、弟の真之は連合艦隊の作戦参謀として日本海海戦を勝利に導いた軍人兄弟である。子規は弟の真之と同学年で大学予備門（現東京大学）でも机を並べる。ちなみにここでは夏目漱石も同級で、以後子規と漱石は生涯を通じて誼を交し合う。余談だがこの人たちの学年は、1873（明治6）年に日本に小学校ができたときの、第一期生ではないだろうか。

子規は日清戦争に新聞「日本」の記者として従軍の後に結核におかされて倒れ、東京根岸の家で長い闘病生活ののちに生涯を終える。その7年程の間に、多くの句や歌や『病牀六尺』や『仰臥漫録』などの評論、随筆を精力的に発表する。子規の結核は後半にカリエスとなり、耐え難い苦痛に襲われるのだが、その闘病生活を支えたのは妹の律であった。

「幼女のころから子規がよその子にいじめられると石を持って駆けだした



◀『ひとびとの登音 上・下』  
司馬遼太郎著  
中公文庫  
定価 本体上 667円＋税  
下 552円＋税

という律の心は、看病中はむろんのこと、晩年におよんでも変わっていない。自分を措いてたれがああ弱い兄を護るかという悪相の<sup>げごしん</sup>外護神のようなすさまじさは、律を戯画化して考える場合、もっとも的確であった」

子規の死後正岡家の当主となった律は養子を取る。13歳の正岡忠三郎である。「忠三郎さん」は仙台の旧制第二高等学校（現東北大）に進む。大柄で大酒のみであったが特に際立ったところはなく、卒業後は関西の阪急に入社する。そこでは電車の車掌を勤める。当時の出来事をのちに忠三郎さんの妻となった、あや子さんが話す。「六甲山に寝ころんで電車がくるのを待ってたといってたわ」昔の電車の車掌は忙しく、大きなまぐちに釣り銭をいれてひもで頸からぶらさげ、駅に着くたびに跳び降りて切符を売っており、このときは発車時に乗り遅れて置いてけぼりをくったらしい。

また「忠三郎さん」は阪急百貨店の婦人服売り場にも立つ。1968（昭和43）年秋、作者の司馬遼太郎は著作『坂の上の雲』の登場人物である秋山兄弟や正岡子規らの子どもたちに、大阪のキタの料理屋「蘆月」に集まってもらう。忠三郎さんも末席に連なっている。作者としては執筆中

の作品『坂の上の雲』の取材ではなく、父母の名前を使わせてもらったことへの挨拶の意味であったらしいが、歴史的有名人の子たちが集まった、この場の情景は想像するだに温かいものがある。

この本には書名どおりさまざまな人物が登場する。忠三郎さんの仙台二高時代からの親友に、西沢隆二という人がいる。詩人で筆名、ぬやまひろし。本人は「タカジと呼んでくれ」と人には頼んだ。もと共産党員で、治安維持法で逮捕され、終戦まで12年間投獄されていた人である。一昔前、全学連の学生運動華やかなりし頃、学生たちが口ずさんだ「若者よ」はこの人の詞である。

タカジは歌が好きであった。いまのNHKの紅白歌合戦—当時の選抜歌唱大会が近づくとそわそわする。旅行中でも途中でやめて、歌唱大会を聞くためにいそいそと帰る。「当日、かれは一時間前に受像機（テレビ—筆者注）の前に椅子を据える。そのそばに湯を入れた魔法ビンと茶の葉を入れた筒、急須、茶碗などをならべ、すべての準備ができあがると、かならず夫人の摩耶子に電話した。『いよいよだ』」

書名どおりさまざまな人々が登場し、営みの歴史が織りなされていく。